

第2回
安吾賞

ANGO
Awards
The 2nd

安吾賞とは生きざま賞である。

第2回安吾賞
野口健様
2008年2月9日
新潟市長 保田昭



新潟市

安吾の覚悟

日本文化私観

どうしても書かねばならぬこと、書く必要のあること、ただ、そのやむべからざる必要にのみ応じて、書きつくされなければならぬ。

安吾の純情

桜の森の満開の下

彼の手の下には降りつもった花びらばかりで、女の姿は掻き消えてただ幾つかの花びらになっていました。そして、その花びらを掻き分けようとした彼の手も彼の身体も延した時にはもはや消えていました。あとに花びらと、冷めたい虚空がはりつめていたばかりでした。

安吾の喝

墮落論

随分道を通ずる事によって、自分自身を発見し、救わなければならない。政治による救いなどは上皮だけの愚にもつかない物である。



小説家
(安吾賞推薦人)
火坂雅志

安吾の言葉

私の仕事場の壁に、小さな額がかかっている。机のすぐ前にあるから、執筆に疲れてふと目を上げたとき、必ずその額を見ることになる。額に入っているのは絵ではない。

——飄然去来

と書かれた安吾直筆の言葉である。大阪の古本屋の目録で見つけ、ほとんど額代だけのような値段で手に入れた。変色したうすっぺらな紙に書かれていただけに、売るほうも真贋を疑っていたのだろう。安吾の評伝の著者である七北数人さんに見せたところ、一瞥するなり、まちがいないくホンモノですと太鼓判を押していただいた。

第2回安吾賞

火坂氏原作の『天地人』が、二〇〇九年のNHK大河ドラマに決定した。

飄然とあらわれ、飄然と去る——安吾の人生観がよく出ている言葉だと思ふ。ほかに、有名な「あちらこちら命がけ」という色紙もいし、「神の国の娘は情け大らかにして濁りなし」は悠々としてどこか哀切な言葉だ。安吾の小説もおもしろいが、彼が残した言葉は飄々として大きく、深く胸に突き刺さる。



新潟市長
篠田昭

第2回安吾賞は、アルピニストの野口健さんに決定しました。

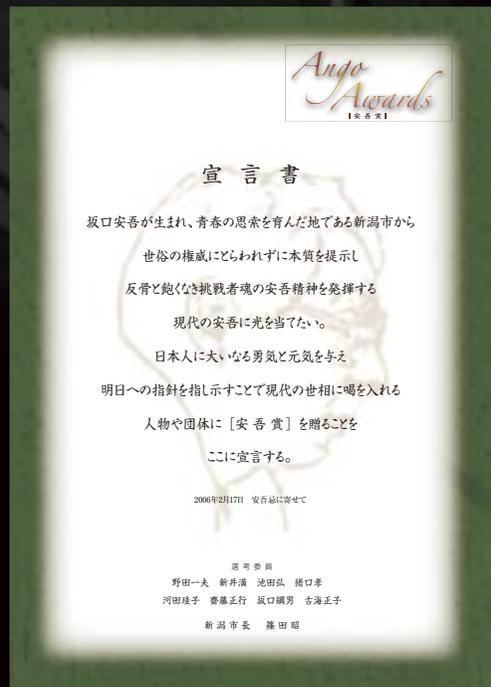
野口さんは一九九九年、二十五歳で七大陸最高峰世界最年少登頂記録を樹立。その後は、エベレストや富士山での清掃登山、主に小中学生を主な対象とした「環境学校」の開校など、積極的に環境問題に取り組んでおられます。

自らの信念を貫き通し、新たな挑戦を続ける野口さんの姿、生き方はまさに安吾的であり、日本人に勇気や元氣、喝を与えてくれたという点で、安吾賞にふさわしい人といえます。

また、新潟市特別賞は、ドイツ人の建築デザイナー、カール・ベンクスさんに贈らせていただきます。

ドイツから遠く新潟の地に居を構え、古民家の再生を通して、日本文化の魅力や伝統的な職人技術の素晴らしさなど、私たちにメッセージを発信してこられたベンクスさんの活

ANGO Awards The 2nd



新潟市ゆかりの作家である坂口安吾は、文学をはじめ多くの分野において何事にも一生懸命に挑み続ける人であった。安吾の精神を具現し、さまざまな分野で挑戦し続けることにより、わたしたち日本人に喝を与えた個人または団体を表彰する「安吾賞」。挑戦者を応援する新潟市は、第2回の安吾賞受賞者として、アルピニスト『野口健』氏を選出した。



選考委員長
野田一夫

動に敬意を表して、この賞をお贈りすることにしました。新潟市はこれからも、反骨と飽くなき挑戦者魂の安吾精神を発揮する現代の安吾に光を当て、安吾賞を全国に発信してまいります。

第2回「安吾賞」の選考を終えて

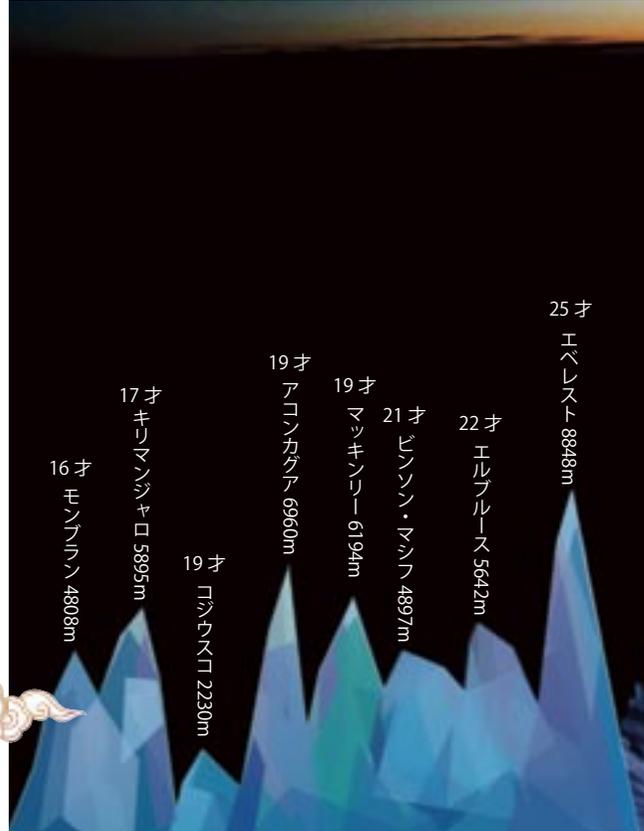
「安吾賞」は文学賞でもなければ地域貢献賞でもなく、極めて坂口安吾的な生き方をした人を顕彰する、生きざま賞として創設された。ところで実は、「安吾的生き方とは……」という根本問題について委員の間の意見が必ずしも一致しなかったにも関わらず、野田秀樹氏の受賞に至る昨年の選考過程は意外に順調だった。今年の野口健氏の場合も幸い全く同じだったから、こうして回を重ねていければ、多彩な受賞者の生きざまに共通したものとして、広義の「坂口安吾的生き方」が万人によって納得されるようになるに違いない。

第2回 安吾賞

アルピニスト

野口 健

KEN
Noguchi



その突破力は 極めて安吾的である。

高校の停学中に出会った故・植村直己の著書『青春を山に賭けて』が、落ちこぼれて社会との壁に突き当たり苦悩していた少年野口健を「夢」に駆り立てた。「そっだ！自分を戻すために山に登ろう！」
全くの登山初心者だった野口少年が、旧ヨーロッパ大陸の最高峰モンブランに登頂したのは、わずか十六才のときだった。「七大陸の最高峰を最年少で登頂する」。
そのとつともない夢に向かって疾走するも、既成概念の壁、売名行為だという中傷、自身の甘さから生じる挫折と葛藤を幾度も味わい、その度に這い上がっていく生きざまこそが前人未到と言つてよい。
二十五才で七大陸最高峰を制覇した後も、エベレストや富士山など「清掃登山」の決行、「シエルパ基金」の設立や「環境学校」の開校など、現在も険しい挑戦者の道を歩き続けている。
その突破力は極めて安吾的であり、彼の破天荒な生きざまには安吾も舌を巻くに違いない。



【野口健 (のぐち・けん)】
アルピニスト。1973年8月21日、アメリカ・ボストン生まれ。高校時代に故・植村直己氏の著書『青春を山に賭けて』に感銘を受け、登山を始める。
1999年、エベレストの登頂に成功し、7大陸最高峰世界最年少登頂記録を25歳で樹立。
2000年からはエベレストや富士山での清掃活動を開始。以後、全国の小中学生を主な対象とした「野口健・環境学校」を開校するなど積極的に環境問題へ取り組みほか、現在は、清掃活動に加え新たに地球温暖化に対する取り組みにも力を入れている。2007年12月に大分県にて開催された「アジア・太平洋水サミット」の運営委員として、「温暖化による氷河の融解」を取り上げる先導役を務め、各国元首級への呼びかけなど精力的に行った。
主な著書に『確かに生きる~10代へのメッセージ~』（クリタ舎）、『あきらめないこと、それが冒険だ』（学習研究社）、第53回青少年読書感想文全国コンクール課題図書、『落ちこぼれてエベレスト』（集英社）などがある。
公式ウェブサイト
<http://www.noguchi-ken.com/>

【安吾とは】
自身すらも
壊しかねないような
尖った感性で
時代や人間の
本質を
描いた安吾



賞状：安吾が眺めて思索した日本海をイメージして制作された。天高く流れる雲と、波間に富士を添えている。



アジア・太平洋水サミット



環境学校



シエルパ基金



富士山清掃



エベレスト清掃登山

12/21 受賞者発表会での各氏のスピーチ（抜粋）

東京メトロポリタンテレビジョン(株) 代表取締役社長大木 充
私がソニーに勤めていたとき、彼の
スポンサーになった。夢を追いかけているその姿は
普通の十八歳とは何か違っていた。
安吾賞の受賞は彼の生きざまが評価された
ということ、嬉しく思っている。

コスモ石油(株) 環境室長鶴田 穂積
最初に安吾賞受賞の報を聞いたとき少し戸惑ったが、
安吾賞は生きざまと聞き、彼こそ小さいと思った。
子どもたちやシエルパが彼について来る、そして支援する。
彼のうしろ姿は人を導く。

小諸市長 芹澤 勤
今回、野口さんが安吾賞を受賞したことで、若い人が
坂口安吾に関心を持ち、新潟市が創設した
ある意味でローカルな賞がメジャーになっていくと思う。

(社) 日本パル協会会長 伊藤 忠一
健くんは高校生のときからヒマラヤ登山を始めたが、
そのころから「ヒマラヤがあんなに荒廃して
いることに驚いた。何とかしなきゃ」と言っていた。
それがエベレスト清掃につながったのだと思う。

野田秀樹 (第1回安吾賞受賞者)
安吾賞は文学賞でもないし、どういう賞なのか
よく分からないまま昨年第一回をもらった。
さて2回目はどうするのかと思っていたら野口健さん
うまいこと見つけてきたなあというのが感想。
野口さんは三十四歳。たった一年で
十八歳も若返ったんだからこの賞は素晴らしい。

衆議院議員(元環境大臣) 小池百合子
この賞は「安吾的な生き方」をした人に贈られる賞だそっだが、
安吾的な生き方とは野口健の生き方を見るのと分かる。
つまり既成概念にとらわれず爆発力を
持つて進める、ということなのだろう。
今回の受賞を期に環境活動に拍車がかかり、
ますますホットに活動してくれることを期待している。

古い民家を壊すことは 文化を捨てることと同じ。

ベルリン生まれのカール・ベンクスが、築百八十年の古民家を再生して新潟県十日町市（旧東頸城郡松代町）に移り住んだのは一九九三年のこと。打ち捨てられ朽ちて行く古民家の中に、自然環境に寄り添うような生活の知恵と、日本の職人たちの高度な技を発見し、「古い民家を壊すことは、宝石を捨てて砂利を拾っている」と警鐘を鳴らしてきた。

古い民家をいつくしみ残していくことは、文化を伝えると同時に世界に誇る職人の技術を伝えることもある。

遙か九千kmかなたの国、ドイツからやってきたカール・ベンクスのマイスター魂が、忘れかけていた日本文化の再発見に導いてくれた。自ら新潟に居を構え、たくさんのメッセージを発信し続け、日本人に「喝」を入れる生き方は、多分に安吾的である。

再生前と再生後



カール・ベンクス コメント

受賞の話をいただき、とても光栄な事と感謝しています。子供の頃から興味があった日本の文化・建築、その日本で認めていただけたい事は本当に嬉しいかぎりです。

四十年前に日本に来たころは汽車の窓から茅葺屋根の古い民家はまだ沢山残っていました。今は汽車の窓から見てもみんな同じ形の住宅ばかり、土地ごとの特徴もありません。日本の素晴らしい文化がどんどん失われていくようで大変残念に思います。昔の建物は一般的な家でもいい材料を使っています。二百年前に建てられた家を見ると、その家を作った職人さんたちについての様々な情報を取り取ることができません。古い家が姿を消すのは、其中に宿っていた精神

や文化も捨てることになります。日本建築を世界に広めたブルーノ・タウトは「日本の設計士達は幸せのはず：なぜなら世界には無い技術をもっている職人がいる」七十年以上前から日本の建築技術は世界に高く評価されています。

今では、家も使い捨てという考えがあつて二十〜三十年で建てかえようとする。お金もかかり、ゴミもです。《古い家のない町は、思い出の無い人間と同じ》という東山魁夷の言葉がありますが、素晴らしい文化・技術や材料がこのままなくなってしまうのは悲しい、新しいものを作る必要はあるにしても伝統的なものを残すことも大切で、私は文化財や博物館ではない一般的な古民家を大事にした

古い建物は、子供のように面倒を見なければなりません。生き物を扱うようにその建物を愛し、可愛がらなければ建物は生まれ変わりがありません。家を再生する事は哲学を持つ事です。私の仕事は古民家の再生です。ただの修理ではなく、宝石の原石を磨くような仕事なのです。

一度失ったら
二度と戻ってこない
日本の
文化・技術・芸術を
後世に伝えられるのは
今が最後

Karl Bengs

【カール・ベンクス】

建築デザイナー 1942年8月7日、ドイツ・ベルリン生まれ。Fresco (フレスコ)・家具職人の父の影響を受け日本文化に関心を持つ。ベルリン、パリで建築デザインオフィスに勤務しながら建造物・家具の復元・修復を学ぶ。

1966年、空手を学ぶため日本大学に留学。以降建築デザイナーとしてヨーロッパをはじめ日本で活動。特に日本の古い家に強く惹かれていく。

1981年、大工さんを連れてドイツへ。日本の寺院をデュセルドルフに移築する仕事に携わる。

1993年、新潟県十日町市（旧東頸城郡松代町）で、現在の自宅（双鶴庵）となる古民家の移築再生。

2001年、新潟県「にいがた木の住まいコンクール」入賞。

カール・ベンクス&アソシエイト 公式ウェブサイト <http://www.k-bengs.com/>



カール・ベンクス 新潟市特別賞



賞状にはベンクス氏が再生した民家と、千鳥にドイツの国旗色があしらわれている。
下：副賞のトロフィー



野口健から 安吾へ

時代や人間の本質を描いた安吾。

「反逆者」「無頼派」「反権威」。
新潟市出身の作家・坂口安吾を評する言葉は様々だ。神経衰弱になりつつも創作を続け、自身すらも壊しかねないような尖った感性で、時代や人間の本質を描いた安吾。その言葉は時代を超えてなお人々の心を揺さぶり、感動を与える。

昨年、生誕百年を記念して創設されたこの安吾賞は文学賞ではなく「安吾的な生き方」に対して贈られる賞だと聞いた。安吾的な生き方とはどのようなものなのだろうか。それは私の解釈だと「既存の価値観や旧弊にとらわれず、社会に警鐘を鳴らし、自らを生ききったもの」という風に思っている。

出会い、今に至るまで何故、自分は山に登り続けているのだろうかということもわからない。また日本の象徴である富士山で清掃活動を開始して約八年。最初は年間で百名たらずの参加者が今では年間六〇〇〇名を超えるまでになり、一種の社会的なムーブメントにまで発展した。でも私は何故、この活動を続けているのだろうか。

それぞれの活動の動機に理由をつけることはできる。エベレスト清掃は日本を侮辱したヨーロッパの登山家と日本の一部の山岳関係者に対する怒りがそうさせたとも

それでは私自身がそういった生き方をしてきたかというと、正直なところ自分ではよくわからない。何故なら私はそのように生きてこようという意思は別になかったからだ。

日本は経済は一流だけど、マナーは三流だ。

そもそも安吾は意図的にあのよるな波乱に満ちた生涯を送ったのだろうか。私はそれは違うと思う。安吾はただそのようにしか生きる事ができなかったのではないか。神経衰弱になりながらも、人間や社会を穴が開くほど見つめ、ペンをとり、書き続けることでしか自己の生命を維持する事ができなかったのではないかとと思う。

エベレストをはじめ訪れたとき、ゴミの多さに驚いた。様々な国のゴミがあったが、日本語が書かれているものが実に多かった。ヨーロッパのある登山家が散乱する日本のゴミを指差し「日本は経

言えなくもない。登山は高校時代に落ちこぼれだった自分が何かで人に認められたいという欲求の表れだったのかも知れない。富士山の清掃は、不法投棄を繰り返す犯罪者たちへの怒りと一言えなくもない。

私の中には、ある乾いた穴のようなものがある。

でも正直、私はそれらの理由に真の意味での本当のものを感じない。人間がある行為をはじめ、それを維持していく理由はもつと混然としていて一言で捉えきれものではないと思う。何が私をそうさせるのか。それはわかるようではわからないのだ。

ただ一つだけわかることは、抽象的になるが、常に私の中には、ある乾いた穴のようなものがあることだ。そして私はその穴を埋めようとする自分を抑える事ができない。その穴を埋める行為こそが私の活動であり、人生であるといえる。つきつめて考えると、結局、

「済は一流だけど、マナーは三流だ」と言った。

実際には一部の日本の登山家が捨てたゴミのだが、日本という国自体を侮辱された事が許せなかった。またエベレストでの清掃開始後は、日本の山岳界の一部の方々からもご批判を受けた。要するに「黙っている」ということだった。

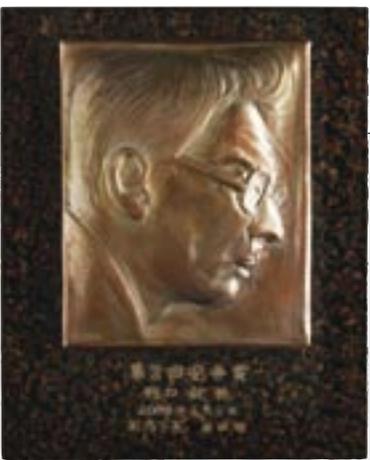
二〇〇〇年から四年連続で行ったエベレスト清掃登山で結果として三名のシェルパ（ネパールの山岳民族。登山隊のサポートを主な生業とする）が命を落としてしまった。私自身も入院を繰り返した。親や友人から「ゴミ拾いで命を落としてどうする」と何度も注意を受けたが、私はやめるつもりなど毛頭なかった。

今、思えばあのかの自分が何故、活動を続けられたのか。わかるようでわからない。振り返れば、そもそも高校を停学になって山にこういふ風にしか生きる事ができないということになる。

私は人生とは己を表現する、自己表現の舞台だと思っている。私はただ生きてきた。ひたすら生きてきた。それが今までの自分の全てだと思ふ。

今回、結果として私の生き様がこのような形で評価されることに喜びを感じています。今後もこの賞に恥じることのないよう生きていきたいと思ふいます。ありがとうございます。ありがとうございました。

2008年1月 エベレストにて安吾賞記念ワッペンを胸に



安吾賞記念盾
監修：小磯稔（新潟大学名誉教授）
彫金：亀倉康之（日展会員、日工会理事）
背景板：『錦塗』新潟市漆器同業組合



ANGO Awards
The 2nd



安吾賞選考委員



委員長
野田 一夫
(財)日本総合研究所理事長
多摩大学名誉学長



副委員長
新井 満
作家



池田 弘
(学)新潟総合学院理事長



猪口 孝
中央大学教授
法制審議会委員
日本学術会議会員



河田 珪子
支え合いの地域づくりアドバイザー
「うちの実家」代表
訪問介護員養成研修講師
新潟大学歯学部非常勤講師



齋藤 正行
安吾の会世話人代表
新潟・市民映画館シネ・ウインド代表



坂口 綱男
写真家/エッセイスト
(坂口安吾長男)



古海 正子
日本IBM人事部
GAアシスタントサービスマネジャー

安吾賞推薦人(敬称略 50音順)

青木 邦雄 (財)東日本鉄道文化財団専務理事
青島 健太 スポーツライター
嵐山 光三郎 作家
安斎 隆 (株)セブン銀行代表取締役社長
稲盛 和夫 京セラ(株)名誉会長/稲盛財団理事長
敦井 榮一 新潟商工会議所会頭
植村 嗣音 著述業/ハーバー研究所監査役/DACグループ顧問
内田 力 (株)コロナ代表取締役社長
梅原 猛 哲学者
萩野 アンナ 作家/慶應義塾大学教授(文学部)
角川 歴彦 (株)角川グループホールディングス代表取締役会長
(株)角川書店取締役会長
川淵 三郎 (財)日本サッカー協会キャプテン
菊池 明郎 筑摩書房代表取締役社長
北川 正恭 早稲田大学大学院教授
小林 幸子 歌手
佐藤 忠男 映画評論家/日本映画学校校長
佐藤 信秋 参議院議員
白井 克彦 早稲田大学総長
関川 夏央 作家/評論家
高澤 正樹 新潟放送相談役/日本文芸家協会会員
武田 鉄矢 海援隊
立松 和平 小説家
田中 里沙 宣伝会議編集室長
檀 太郎 CMプロデューサー/エッセイスト
中山 輝也 新潟経済同友会代表幹事
野沢 慎吾 セコム上信越(株)代表取締役
服部 幸應 (学)服部学園理事長/服部栄養専門学校校長
医学博士/新潟市食と花の総合アドバイザー
朝日新聞コラムニスト

早野 透 作家
半藤 一利 小説家
火坂 雅志 (株)ベネッセコーポレーション代表取締役会長兼CEO
福武 總一郎 作家/法政大学教授
藤沢 周 (株)ティー・ヴィー・キュー九州放送代表取締役社長
牧 作樹 編集工学研究所所長/ISIS編集学校校長
松岡 正剛 (株)ミジマアートギャラリー ディレクター
三猪 未雄 アルビレックスチアリーダーズ・チーフディレクター
三田ジョンストン智子 俳優
三田村邦彦 作家
村松 友視 日本銀行監事
村山 俊晴 岩波書店代表取締役社長
山口 昭男 デザイナー/プロデューサー
山本 寛斎

安吾賞賛同者(敬称略 50音順)

渥美 千尋 外務省南部アジア部長
泉田 裕彦 新潟県知事
内山 秀夫 慶應義塾大学名誉教授
内海 桂子 (社)漫才協会名誉会長
遠藤 実 (財)遠藤実歌謡音楽振興財団理事長
ジェームス三木 脚本家
篠田 正浩 映画監督/早稲田大学特命教授
瀬戸内 寂聴 作家
檀 ふみ 女優
手塚 眞 ヴィジュアルリスト
福原 義春 (株)資生堂名誉会長
松永 二三男 日本テレビ放送網(株)企画開発担当部長
宮田 亮平 東京藝術大学学長
株式会社旺文社

肩書きは平成20年1月1日現在のものです。



第2回 安吾賞授賞式 2008年2月9日 新潟市民芸術文化会館

- 第1部 記念講演「安吾さんとの思い出」 半藤一利(作家)
第2部 授与式 安吾賞 および 新潟市特別賞
野口健トークライブ「あきらめないこと、それが冒険だ」

【安吾賞事務局】〒951-8550 新潟市文化政策課
TEL. 025-226-2563 FAX. 025-230-0450
E-mail bunka@city.niigata.lg.jp
【安吾賞】URL
<http://www.city.niigata.jp/info/bunka/ango/>
【坂口安吾デジタルミュージアム】URL
<http://www.ango-museum.jp>